

秋水通信

第37号

2024.4.15

幸徳秋水を顕彰する会
〒787-0010 四万十市古津賀4-41
四万十市生涯学習課内

ホームページ
<http://www.shuusui.com/>
090-6827-9129 (田中全)
✉: zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

秋水門人 坂本清馬 来年没五十年

大逆事件の最後の生き残りとして一九六一年再審請求の訴えをおこした坂本清馬は、来年二〇二五年一月十五日、没五十年を迎えます。(行年八九才)。

清馬は一八八五(明治一八)年、母の実家の高知県室戸で生まれ、高知市で育つ(父は中村出身)。中学を中退、上京後、社会主義を知り、幸徳秋水を訪ね書生となる。堺利彦、荒畑寒村ら多くの仲間とも接したが、菅野須賀子との関係等も絡んで秋水と決別。大逆事件のでっちあげ容疑とは無縁であったにも関わらず逮捕され、死刑判決を受けた。

翌日無期懲役に減刑され秋田監獄に送られ、高知監獄で仮出獄を許されたのは二四年後(一九三四年)であった。太平洋戦争中、秋水の故郷中村に永住。戦後は一時中村町会議員をつとめ、公民館や結核療養所の設置運動や日中友好運動等に取り組んだ。再審請求裁判は東京高裁で棄却されたが、その後も無実を訴え続け、その執念はすさまじかった。



坂本清馬

除幕式は来年一月二四日の秋水墓前祭を清馬との合同墓前祭とし、同時に行います。有志によって坂本清馬の生涯を記録する映画を製作する企画(製作委員会を立ち上げ予定)も進められています。なお、坂本清馬とともに再審請求裁判の原告になった岡山の森近運平の妹、森近栄子も来年一月十日、没五十年となります。(行年七八才)。(田中全)

秋水刑死(一)三年記念墓前祭

秋水刑死の日、一月二四日は毎年寒い。今年は一画銀世界となったが、昨年同様約六〇人参加。一二時半開始。宮本博行会長、幸徳家縁者(木戸、田中)、市長、議長、教育長に続いて、労組(連合、市職労)、商工会議所、中村九条の会、自由民権友の会の各代表らが献花。県外からは二人参加(愛媛、神奈川)。宮本会長の追悼の言葉(要旨)。「今年には自由民権運動が始まってから一五〇年。先生はこの時三歳で民権少年として成長。兆民先生から自由・平等・博愛を学び堂々と非戦・平和の旗を掲げてたかった。いま日本は当時と似た状況。ウクライナにガザ。日本政府は外交努力を放棄したまま、大軍拡、大増税の道に大きく舵をきっている。私たちは先生の志を継ぎ、日本が再び戦争することなく、あらゆる人権が守られる社会になることをめざして努力することを誓います。」

一四時からは商工会館三階ホールに会場を移して、日本近代史研究者の公文豪氏(香南市)による記念講演会「幸徳秋水と中村の自由民権運動」を開いた。四人参加。講演内容は四ページの通り。



雪の秋水墓前祭 2024.1.24

自由民権一五〇年記念事業

自由は土佐の山間より。今年は一八七四(明治七)年一月十七日、板垣退助らが明治政府に「民撰議院設立の建白」を提出してから一五〇年になります。自由民権運動は日本の民主主義や立憲主義の出発点となりました。秋水もその申し子の一人で、「余は如何にして社会主義者となりし乎」の一番に「土佐に生まれて幼より自由平等説に心酔せし事」と書いています。

高知県では秋水顕彰会を含む団体、個人で自由民権一五〇年記念事業実行委員会を立ち上げ、一年間をかけて諸事業に取り組みます。その第一弾として、一月二一日、高知市立自由民権記念館民権ホールにおいて、「いまの政治に土佐から吠える」をテーマに、公文豪氏による記念講演「自由民権の現代的意義―民撰議院設立の建白から一五〇年―」と、デモクラシータイムスのネット番組「3ジジ放談」(平野貞夫、佐高信、前川喜平)の公開収録をおこないました。

平野貞夫氏は地元出身の元参議院議員。会場いっぱい約230人集まりました。「3ジジ放談」はYouTubeでご覧ください。



3ジジ放談
左より佐高信、平野貞夫、前川喜平
2024.1.21

没後五十年 坂本清馬の想い出

国際啄木学会理事
森近運平を語る会副会長
伊藤 和 則

二〇二五年一月一日は坂本清馬の五十周年忌になる。思えば、石川啄木を通して幸徳秋水を知り、その故郷である中村市（現四万十市）に初めて出向いたのは、一九六九（昭和四四）年だったと思うが、それから半世紀余りが過ぎたことになる。

当時は高速道路もなく、住まいの広島市を出て竹原市から松山市へフェリーで渡り、そして道路整備も不十分な国道五六号を宇和島市経由で六、七時間、当時のマイカー移動は体力勝負だった。

坂本清馬とは突然の出会いだった。中村の高知県交通バスターミナル付近で、車窓越しにすれ違った黒い犬を連れて着物姿で歩いている老人の顔は見覚えがあった。大逆事件再審請求棄却を報じる新聞の写真で見た本人で、後に刊行された『坂本清馬自伝』や『残夢』の口絵にある犬を連れて歩く写真そのものだった。初めての中村市訪問は、坂本清馬に関する準備は全くしていなかったこともあるが、それ以上に厳しい容貌に圧倒され、自宅を訪問する勇気がなかった。



清馬(22歳)と幸徳多治 清馬所蔵

当時の幸徳秋水の顕彰活動は幡多地区労働組合が中心で盛んに行なわれていたことに比べ、坂本清馬の支援や対応は秋水に比べ一歩も二歩も退いた状態で孤立感が見えた。その要因の一つに本人の激情的な性格があったことは間違いない。

そんな中で本人が心を開いて話し相談したのは、尾崎暁一中村市立図書館長と尾崎栄中村市議会議員だと知り、私も坂本清馬に対する情報などを図書館に尾崎館長を訪ね、そして尾崎市議の自宅を訪問して多くの教示を得た。

尾崎市議の自宅を訪ねて外出されていたときは、市議が帰られるまで奥様と色々話したことや、何年だったか雪の中で行なわれた秋水墓前祭で尾崎市議と並んでいる写真を見て懐かしく思い出される。

尾崎館長には図書館で資料コピー等でもお世話になった。坂本清馬の昭和二十一年発行の『特赦状』、昭和二十年発行の『假出獄者旅券』や秋田監獄時代の『上願書』など多くのコピーを持帰ることが出来た。坂本清馬を訪ねて聞いた中の事柄を思いつくままを記してみよう。

逮捕されて取調べを受けた際、最初は「従犯は正犯に比べて刑は軽い」と聞いており、自分は無実だから万が一罪を問われても従犯だと思っていたが、判事はすぐに「従犯も正犯と同様の刑」と言い変ったので動揺した。そして大審院の判決は想定していたこととは全く逆の結果で私を含む四名が死刑だ。

死刑宣告の翌日に天皇陛下の恩赦で無期懲役に減刑を伝えられた気持ちを探ると、身に覚えのない罪で死刑を宣告さ



右から幸徳富治、森長英三郎、清馬、森岡邦廣
1964.10.12 清馬所蔵

れた悔しさと混乱する気持ちの中で死を覚悟したが、翌日に典獄室に呼び出されて無期刑になったと言われた時は、「生かされた、助かった、これで生きられる」と本当に嬉しくて涙がぼろぼろと流れて止まらなかった。

収監された秋田監獄は「寒かった。冬は極寒の地だった」と言う。夜具は薄い敷き布団と掛け布団が一枚ずつ、かしわ餅のように使用するのだが寒くて眠れず、規則違反だが掛け布団を輪のように巻いて縛り、寝袋のようにして寝ると温かった。ただ、翌朝は見つかからないように早く起きてしわを直すのが大変だったと、自慢めいて話していた。

母親が亡くなったと知らせを受けた後に、典獄の言い方が癪に障ったのと母に詫げる気持ちとが重なって死ぬ気になり、監房のドアの敷居の下は石造りで、そこをねらって頭を打ち付けたが、敷居内側部分の石の角は丸く加工されていたので死に至らず、看守が気絶しているところを助けてくれたと、笑っていた。

昭和の始め頃に法改正で再審請求が出来ると知り、生きる目標が出来たと懐かしむように話してくれた。

三度目訪問の時だと思いが、中村市に出向く予定を連絡すると、坂本清馬が自宅前の旅館に予約をしてくれた上に、夕食を一緒に食べようと自宅に招いてくれ

たことがあった。

自宅一階の二畳の居間に茶卓があって、養女のミチエさんを迎えた三人で話しながら、用意してもらった巻き寿司と鯉のたたきを御馳走になった。

ミチエさんは食事の時も普段訪ねたときも遠慮もあつたのか余り話されることもなく、用事を見つけては動いておられた。従順で芯の強い人だったという印象が残っている。

二階への階段を上がりきると二畳の踊り場で左右に三畳の和室があり、左側の部屋には不釣り合いなダブルベッドが置いてあり、ベッドの上にも下にも書籍や資料類が占領して寝られる状態ではなく、壁際にはリンゴ箱を積み重ねた本棚にも書籍一杯で、作業はベッドの上か横の隙間に小さな座卓を置いてすると本人は言う。資料を抜けるような広さはなく何とか写真を撮ることが出来たが、悔やまれるのは資料や写真の撮影に集中していたこともあって本人を写していなかったことである。

坂本清馬所蔵の写真から再審請求打合せ時と思われる「幸徳秋水の墓碑で坂本清馬・森長英三郎・森岡邦廣・幸徳富治各氏」や「坂本清馬と幸徳多治」、「坂本



秋水刑死60年祭
前列右から大河内一男、神近市子、清馬
1971.1.24 伊藤撮影

高知新聞天野記者連載「美しき座標―平民社を巡る人々」 平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞

高知新聞の連載「美しき座標―平民社を巡る人々」を書いた天野弘幹記者（学芸部長）が二〇二三年度第二九回平和・協同ジャーナリスト基金賞の奨励賞を受賞しました（二月五日発表）。天野さんは当顕彰会会員。

同賞は「平和」と「協同」に関する優れた作品を発表したり業績を残したジャーナリストらを年一回顕彰するもので、一九九五年に創設され（現代委員長は鎌田慧氏、田端光永氏ら六人）、「日本版ピューリッツ賞」とも言われています。二〇〇二年には田中伸尚氏（『大逆事件―死と生の群像―』の著者）も受賞しています。

天野さんの「美しき座標」は高知新聞に二〇二一年一月一日〜二〇二三年三月三十一日、一九四回にわたり七部構成で連載。第一部「楽しき園遊会」（平民新聞の読者懇親会）
第二部「自転車で行こうよ」（秋水らが夢中になった自転車の流行）



高知新聞連載スタート 2021.1.1

第三部「とっちゃんの愛」（田中正造）
第四部「おかしな兆民先生」（中江兆民）
第五部「獄中生活」（入獄者のエピソード）
第六部「新しい人よ」（女性の登場）
第七部「再生への船旅」（秋水、サンフランシスコへ）

天野さんは連載途中の二〇二二年秋、墓前祭において本テーマで記念講演（要旨は本通信三二号収録）をしています。そこで言っていたのは、秋水らが平民新聞を発行し日露戦争に反対のメッセージを出したことは、その後の日本がどう進むのかの「座標の点」を打ったということ。彼らは危険にあらがいながら当時とは違う社会をつくろうとした。しかし、その後日本はダメな方向に進んでいった。しかし、そのことにキチンと向き合わな

い、また同じことにキチンと向き合わな平民社の一人、石川三四郎はのちに、そこには、くめども、くめども、尽きない、美しい泉があったと書いている。バラバラになったガラスのかけらやプリズムの破片を集めるように、彼らの書いたものや記録をもう一度読み直して、それらが写そうとしたものを見出したい。

天野さんは受賞後に寄稿した「大逆事件の真実をあきらかにする会」ニュースレター六三号（本年一月二四日発行）の文章の中で「平民社やその周辺の人たちの人間味あふれる姿を通し、明治以降の近代日本歩みと分岐点を描こうと試みたもの」で、賞は「平民社の人たちにもらったギフト」と書いています。

連載を始めた二〇二一年は秋水生誕一五〇年で「非戦の碑」を建立した年です。また、今年には自由民権運動一五〇年で、高知新聞は民権運動の中で生まれた土陽新聞を前身としています。

本連載は大軍拡、大増税の悪夢がよみがえろうとしているいま、ジャーナリストの矜持を示したものとえます。単行本になることが待たれます。（田中全）

秋水の米国土産 極小辞書

秋水は一九〇五年一月から翌年六月まで、サンフランシスコに渡った。帰国に際し、甥の富治に土産として極小サイズの仏英辞書を買ってきたことを富治は手記「伯父幸徳秋水」（秋水全集別巻一）に書いている。

昨年二月、この辞書が中村に墓参り帰省中の富治の孫（二人娘の三春の長男）の東京在住、池成啓さんから顕彰会に託された。

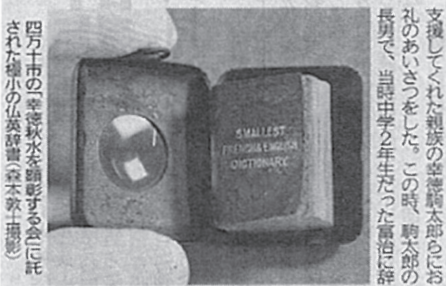
縦2.6×横2センチ、厚みは1センチ、全647ページ。扉には拡大鏡がついている。実用性はなく、小さな取っ手がついているので、ペンダントのように利用され、当時流行していたようだ。

高知新聞連載「美しき座標―平民社を巡る人々」の完結に合わせて、天野弘幹記者が昨年三月三十一日付記事にしてくれた。

天野記者の調査でこの辞書は英国グラスゴウの印刷会社で作ったものであることがわかった。こんな微細な印刷技術が当時あったとは驚き。いざいざ秋水資料室に寄託する予定。

渡米時購入 親族への土産

子孫 四万十市の顕彰会に託す



四万十市の幸徳秋水を顕彰する会に託された極小の仏英辞書（森本敦一撮影）

高知新聞記事（部分） 2023.3.31

（二面より続く）

清馬と馬宗豫（中国人）などの提供を受けてカメラにおさめたのも今では貴重なお宝となっている。

管野スガに対する印象を聞いたことがある。本人は昔を思い出すように「管野さんは姉のように慕っていたので相談もし、ときには針仕事もしてもらった」と語り、茶卓を撫でながら「平たい顔の意味」「美人ではなかったが色気あった」と照れながら微笑む姿は忘れられない。

秋水の死刑に関する話題になると、急に感情が高ぶって突然茶卓を叩きながら、「幸徳は管野スガと結婚するために私を追い出し、結果的に事件に巻き込まれ死刑になった。私が居たらそうはさせなかつた」と秋水と喧嘩して飛出したことを悔やみ、怒り、泣き出すなど感情の起伏は激しかった。

管野スガへの思慕と秋水への敬慕と憤りが交錯し、感情の整理が出来なくなる状況に直面して、どのように返事をしてよいか困った。

坂本清馬は「革命家は結婚して子供を授かると革命意欲が低下し革命は出来ない」という信念があつて、「幸徳秋水は言葉の革命家で行動の革命家ではなかつた」とスガとの結婚を批判していた。

今回、五十数年前の坂本清馬との記憶について書く機会をいただき、思い出すままに記したが、手持ち写真の中に秋水生誕百年刑死六十年記念祭に参加した折に撮った、秋水の墓碑を囲む大河内一男、神近市子らの色あせた集合写真を見ると、色々のことが思い浮ぶが、やはり私の一番の思い出に残っているのは、本人から自宅に招かれたとき、友人から「清馬が食事に招待することなどない、是非訪問しろ」と強い後押しのお陰であるが、坂本清馬と一緒に食事は今も忘れられない。

幸徳秋水と中村の自由民権運動

日本近代史研究者 公文 豪

秋水頭影会で話をさせていただくのは十二年ぶりです。

民権派と帝政派

今年は一九七四（明治七）年、土佐で自由民権運動が始まってから一五〇年になります。当時中村は反民権派（帝政派）の拠点でした。

秋水の幼なじみで親戚でもあった安岡秀夫は後年「是は土地の気風が格別に保守的であるのと、維新前からの勤王気質がぬけなかつたのと、西南戦争当時における土佐の国事犯の経緯から、郡相の重立った者が板垣伯の一派に対して、一種の反感を懐いた」からだと書いています（『雲のかげ』『秋水全集』別巻一所収）。

中村には古勤王党の宮崎嘉道が率いる行余社という保守的な結社があり、西郷隆盛への呼応を企てたが、政府に発覚し挫折。同調しなかつた板垣退助への反発があつた。また、開明的な宮川忠故が代表の修道社もあつたが、宮川は孤立して離れざるをえなかつた。その後、修道社は行余社と合流し明道社となり、さらに幡多倶楽部となる。

宮川は「自由権利の拡充」などを掲げて大成社をつくり、さらに杉正可、小野栄久らとともに公同倶楽部を結成、幡多における最初の民権派結社となつた。それでも明治二二年、幡多三六村のうち民権派の村長は二人しかいなかった。

少年秋水は絵入自由新聞などを読むうちに、少数派の民権派のほうに近づいていった。明治十九年二月、板垣が幡多に狩猟に来た際には十四歳だった秋水が民権派の歓迎の席で祝辞を述べている。

中村中学校廃校問題

明治十八年、秋水が通っていた中村中学（高知中学中村分校）が廃止となり修学の道を一時的に断たれたことは、のちの秋水の人生に大きな影響を与えた。秋水は

一年遅れて高知中学に入るが、ついでにけず途中除籍され最初の挫折を味わった。

高知県は学制発布を受け、明治十一年、高知中学を開校。同十二年には中村、須崎（のち佐川）、安芸に、同十三年、赤岡にも開き、県下五中学となつた。しかし、同十七年、高知以外の四校を高知中学の分校にした。さらに、同十八年、分校をすべて廃止し、高知中学に統合した。

中村中学が廃止になつた背景については、これまで秋水研究者の間で諸説言われてきた。一つは、台風による校舎倒壊説で、秋水全集の別巻二の「年譜」に書かれており、塩田庄兵衛、大原慧、ノートフェルプアも同じ説。二つが、県の財政困難説で、神崎清、糸屋寿雄など。

当時の土陽新聞の記事によれば、県議会において激しい議論があつた中で、有力な廃止統論として、官立よりも私学を優先すべしという自由教育論があつた。植木枝盛は「教育は自由にせざる可からず」（明治十三年）で「全国民をして一様一体の精神に養成せしめんと欲せば則ち浴衣の揃いでもよし、裸の揃いでもよし、齊しく是れ一様一体となり、唯有形無形の差あるのみ。豈国民をして如此操人形に為す可けん哉。宜く精神の異動を養成して以て独立の気象を煥発す可き也」と書いている。こうした風潮を受け、県下では官立学校から私学への移行や、夜学が隆盛となつた。

また、当時の経済状況として、松方デフレによる物価暴落、農村不況の中で減税請願の声が高まり、民力休養が求められていた。こうした背景から高知県は中学分校を全廃したのであり、その巻き添えを食つたのが秋水であつた。

三大事件連運動

秋水は高知中学を除籍になり、しばらく中村で悶々としていたが、明治二十年



中村商工会館ホール 2024. 1. 24

八月、十六歳の時、単身高知へ出かけるのと偽って上京。宿毛出身の民権家林有造の門をたたき書生となつた。

当時、第一次伊藤博文内閣の外務大臣井上馨が屈辱的な内容（外国人判事の任用等）の条約改正をおこなおうとしたことが発覚し、一、言論の自由、二、租税軽減、三、外交失策の挽回を求める運動が盛り上がりつつあった。

同年十二月、政府は突然保安条例を發布、五七〇人を東京から追放した。うち二三人が土佐人であり、秋水もその中の一人であつた。政府は土佐人なら秋水のような少年や、職人、湯屋の三助まで放逐した。秋水は冬の東海道を歩いて下り中村へ戻つた。

選挙対立と政府の大干渉

一八八九（明治二二年）二月、帝国憲法が發布され、翌年七月、第一回総選挙が行われた。高知県選挙区は一区（土佐、長岡）、二区（吾川、高岡、幡多）、三区（香美、安芸）に分かれ、原則小選挙区であつたが、面積の広い二区は定数二であつた。自由党は一区竹内綱、二区片岡健吉、林有造、三区植木枝盛を立てた。自由党は一区、三区が地盤であつたが、帝政派（国民党）の強い二区は拮抗していた。

選挙にむけて両派の対立が深まる中で、二月二日、中村で帝政派による自由党員殺傷事件がおこつた。帝政派の演説

会に紛れ込んでいた自由党の若者十数人が夜の帰り道、刀で切り付けられ、杉内清太郎が命を落とした。

自由党は杉内を悼んで募金を募り「自由ノ碑」を太平寺境内に盛大に建立。撰文は竹内綱、書は大江卓。「生愛自由死為自由 人貴自由 碑表自由」

第一回総選挙での犠牲者は杉内一人であつたが、自由党に敗れた政府（野党多数）は明治二五年二月の第二回総選挙では大干渉に出た。内務大臣品川弥次郎が陣頭指揮をとり、知事や警察も加担した。各地で殺傷、襲撃事件が頻発をした。海上から中村への入り口、下田には自由党の応援団が船でかけつけ対峙。帝政派は下田の民家に乱入、その中には日本画家中島敬朝、その長男で現シナリオライターの中島文博の祖先にあたる商家島村重助家もあつた。銃弾跡が残る戸袋は自由民権記念館が譲り受けている。

後の首相、濱口雄幸は秋水より一年早い明治三年生まれで、高知市五台山の実家から徒歩で高知中学に通つた。濱口は銃撃を受けたあと病院ベツトで書いた手記で、通学途上いたるところで演説会が開かれ、自由、平等の雰囲気は満ち溢れていた、自分はその時は参加しなかつたが、知らず知らずのうちに感化され、のちに政治の道に進むもつたことと記している。秋水も同時代の空気の中で育ち、師の兆民を超え、自由平等から社会主義へと思想を深化させていったといえる。（一月二四日、幸徳秋水刑死一一三年墓前祭記念講演）

幸徳秋水研究会

毎月第二日曜日 午後一時半
市立総合文化センター（しまんとびあ）
四、五、六月テーマ

鎌田慧『残夢 大逆事件を生き抜いた坂本清馬の生涯』を読む